GIII vol. 147「誰も知らない nobody knows」

開催報告

GIII vol. 147　誰も知らない nobody knows
会期　　2022 年 11 月 2 日（水）ー 2023 年 1 月 15 日（日）
会場　　熊本市現代美術館 ギャラリーIII
参加作家　田口 Boss、tomoyo、小陣貫太郎、大田公子、谷川広人

「誰も知らない nobody knows」展は、熊本及び九州エリアを対象として、「人知れず驚きの制作活動を続ける人」に関する情報提供を呼びかけ、調査を進めて企画した展覧会である。その中には、特別な美術教育を受けたことがないが、ほぼ毎日作品を大量に制作し続けている人や、あるいは、画家としてのキャリアがある一方で、ほとんど周囲の人にさえ知られていない活動をたった一人で続けるなど、驚くべき多様な表現活動をする人たちがいた。

田口 Boss は、島根県生まれで、熊本市在住である。同市で、ヨーロッパのおもちゃの専門店や幼児教室を夫と共に経営していたが、熊本地震で被災。店の運営を知人に譲ったことをきっかけに、コロナ禍も加わり、自宅で本格的に絵を描き始めるようになった。色鉛筆画が中心で、専門的に美術を学んだ経験はない。現在、驚くべき密度の絵をコツコツと日々描き続け、その数は 300 点以上に達する。

tomoyo は、佐賀県生まれで、唐津市在住である。大学で染織を専攻し、帰郷後、一旦制作から距離を置くが、やはり、布を使い何かを制作したいと試行錯誤を続ける中で刺繍を始めた。自分のより深い部分と繋がれることが、針と糸で自由に刺していく行為だと気付いてからは、ほぼ毎日制作している。時折コンペなどに応募する以外は、展示などの経験はなく、勧められて開設したインスタグラムで発表を続ける。ひと針ひと針刺した糸目は自らの言葉であると同時に、向き合う時間は日々大切なものであると本人は語る。

小陣貫太郎は、小国町に生まれ、小国支援学校高等部に在籍する。小学校 3-4 年生頃から、ほぼ毎日、裏紙にオリジナルのキャラクターを描き、それを切り抜き保存している。1 日に 10〜20 体ほどが生まれるため、これまでに家族の説得で 2-3 回処分したが、現在も膨大な数がある。最近まで家族さえも知らなかったが、実はキャラクターの 1 つ 1 つに、日常的に見聞きした情報を自分なりに再構築した背景が設定されている。将来的にはこのキャラクターでアニメ会社とコラボレーションしていきたいという夢を持っている。

大田公子は、大阪府に生まれ。熊本市に在住する。大学を卒業後、得意の語学を生かして海外に渡ったのち、翻訳などの仕事をしていたが、家庭の事情で熊本に戻る。熊本地震後、子育て、親の介護を終え、現在は体調の問題もあり、ほぼ引きこもりのような生活を送っているが、1 日 1 点絵を描き続けることを日課としている。美術を学んだことはないが、SNS にアップすると不思議と海外から反応があり、半信半疑で作品を送るとポーランドやインドで飾られていた。自分のかわりに作品が世界のどこかを旅しているのを想像するのが、今一番の楽しみである。

谷川広人は、山口県生まれで、佐伯市在住である。70 年代に独学で油絵を学び多数の賞を受賞するが、家業の土木業との両立は難しく、約 20 年間制作から遠ざかる。その後、一念発起して、制作を再開するが、この 4 年間は、雨の日以外はほぼ毎日、番匠川河口の河川敷で《佐伯竜宮図》をたった一人で描き続けている。佐伯の川海の生き物をモチーフとした、高さ 4.8m、長さ 200m にも及ぶ大壁画であるにも関わらず、地元でもほぼ知られていないという。

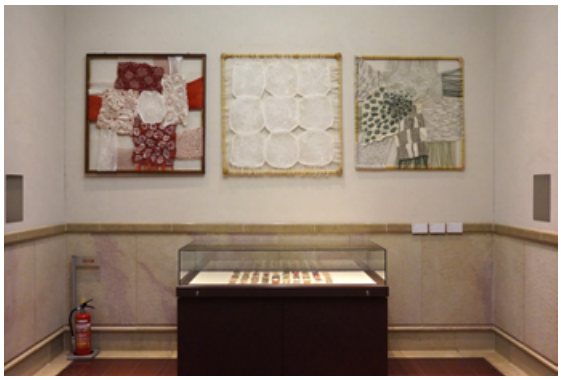
この 5 人が制作を続ける動機や背景は様々であり、アーティストと呼んでよいかどうか、迷う者もある。しかし、その一つ一つの表現は、「私はここに生きている」という、密やかでありながら、過剰で過激なそれぞれの存在の証明に他ならない。今日も九州のどこかの町の、いつもと変わらない日常の中で繰り広げられている、人が人としてあるための表現活動を紹介

することが本展の狙いであった。

編集：坂本顕子（熊本市現代美術館教育事業班主査・学芸員）

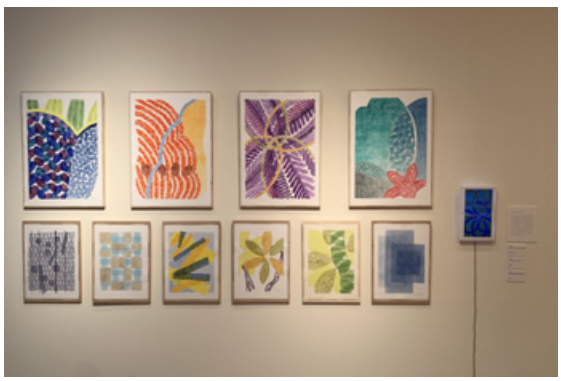
田口 Boss

tomoyo



tomoyo

小陣貫太郎



大田公子

谷川広人